

桜の大木の移植



高原 栄重
(本州緑化常務取締役)

1. 経緯

多摩ニュータウンのB-4地区の、小高い丘の上に、桜の大木が生えている。前林業試験場・浅川実験林長植村誠次博士の推定によると、少なくとも200年以上の老樹だとのことである。200年前といえば江戸時代、将軍家治の頃で、ずいぶん長いあいだ風雪に耐えてきたものだと感心する。

ニュータウン建設のために、その桜の下を京王線が通ることになっている。地主や附近の人々は

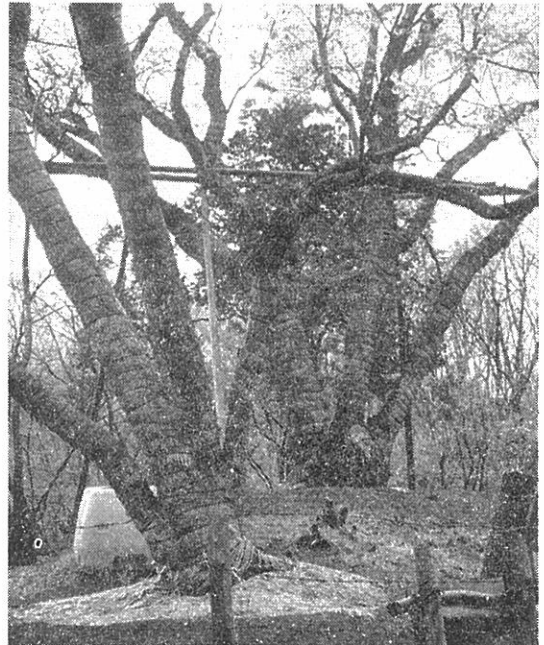
「電車の軌道を変更しても御神木であるこの桜は救済すべきである」と注文をつけたそうである。日本住宅公団をはじめ関係者が集まって協議した結果、いろいろな事情で線路は曲げられないが、次善の策として、これを植え替えようということになり、地主さんたちも、やむをえないものとしてその案をのんだということである。

そこで、日本住宅公団南多摩開発局は前記植村博士に「桜の老木の移植の可能性」を調査してもらった。植村博士は林業試験場の3人の技官とともに調査し「文化財としての重要さは認めるが、桜の移植は相当難しい。移植しても、あまり長生きはしないだろう」というような内容の報告書を提出した。昭和51年夏のことである。

大径木の移植を判断する場合の参考になるかも知れないので、その内容をかいつまんで紹介する。

(1)樹木の移植は地上部と地下部をバランスさせねばならない。大径木は特にその必要性が強い。しかも、今度の場合は樹形を大切にしなければならないから、あまり枝をツメられない。だから活着させることが一段と難しくなる。

(2)「桜」はとくに、地上部も地下部も傷からの



移植ヤマザクラの現場

病菌が侵入しやすく、抵抗力も弱い。

(3)この桜は尾根の上に生えてはいるが、エゴノキ、ホオノキ、コブシ、イヌザクラ、ヒノキなどと、群落的環境を形成している。そういう環境に依存して生命を維持しているのだ。移植して、その環境を失うと、枯れてしまうかも知れない。

と、だいたいこんな内容のものであった。

それからまた関係者が集まって相談した。とにかく、現在持っている限りの技術をつくして移植してみよう。たとえ枯れても、老木木の移植の限界に挑戦したことていろいろの意味を持つだろうし、活着しないとわかっているわけでもない、ということになったらいい。

住宅公団は、造園会社数社に「もし、あなたがこの桜の大木を移植するとしたら、どんな方法でやりますか」という質問、すなわち、「移植施工計画」の提出を求め検討した結果「本州緑化株式

会社」の案を採用することになった。

2. 移植の工法

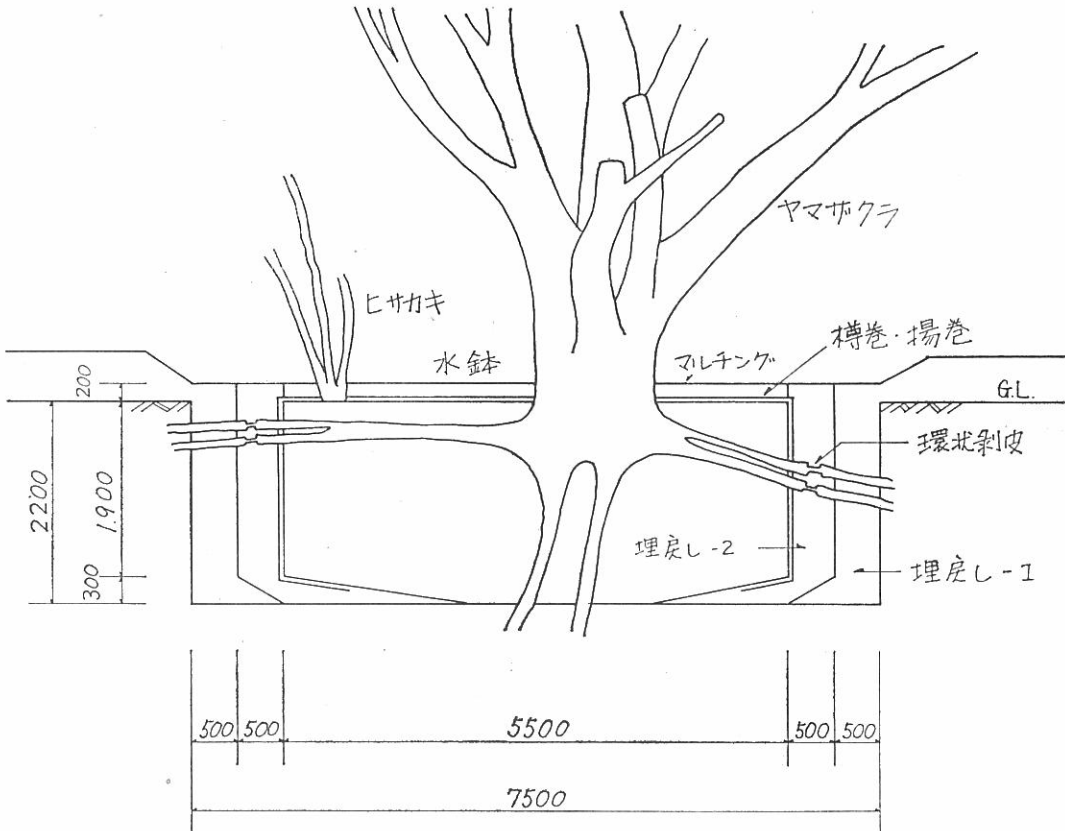
本州緑化(株)の移植の工法は、根回しに工夫がある以外は、とくに目新しいものではない。

根回しをして細根を発生させ、仮設道路を築造し立て曳きする、という方法である。

仮設道路は、総重量100トンを上回るものを動かすわけであるから、よほどしっかりした路盤にしておかないと、作業中不等沈下などしてもらいと、それこそもちも、さげもならなくなる。だから、地山の切土部分を通して、移植先へ達するような場所へ移させてほしいと希望している。

「立て曳き」という工法は、昔からあった工法である。村越惣十郎氏が経験が豊かであるので、氏の指導を仰ぐことになっている。地面に道板を敷いて、その上にコロを並べ、その上にコンタ、

ヤマザクラの根回し詳細図



台木、カンザシなど大木(根鉢を含む)を乗せるためのイゲタを組む。ヤワラを鉢に巻きつけ、ブルドザー(33トン)でひっぱる。ひっぱると道板の上をコロがコロコロ回って、静かに目的地に達するという寸法である。だからなるべく、引き下げるより引き上げるような場所へ移植先を決めてもらいたいものである。活着は、それよりも移植先の土壌や排水条件が問題であるが。

根回しについて、植村博士は、細根を如何に早く、沢山出させるかが決め手であると主張する。移動させる工事屋たちは、根鉢の崩れを心配する。両方の要求を満足させる根回しとはどんな根回しだろうか。ここで採用したのは、次のような方法であった。

(1)支え根や太い根は、根鉢の側面から10~15センチの幅で、心皮まで鋭利な刃物で環状に剥皮する。

(2)(1)以外の根は、根鉢の側面から除去する。

(3)根の剥皮部及び切断面は、発根促進剤(9-ベンジルアデニン)を塗布し、剥皮部はさらにガーゼで一重に被覆する。

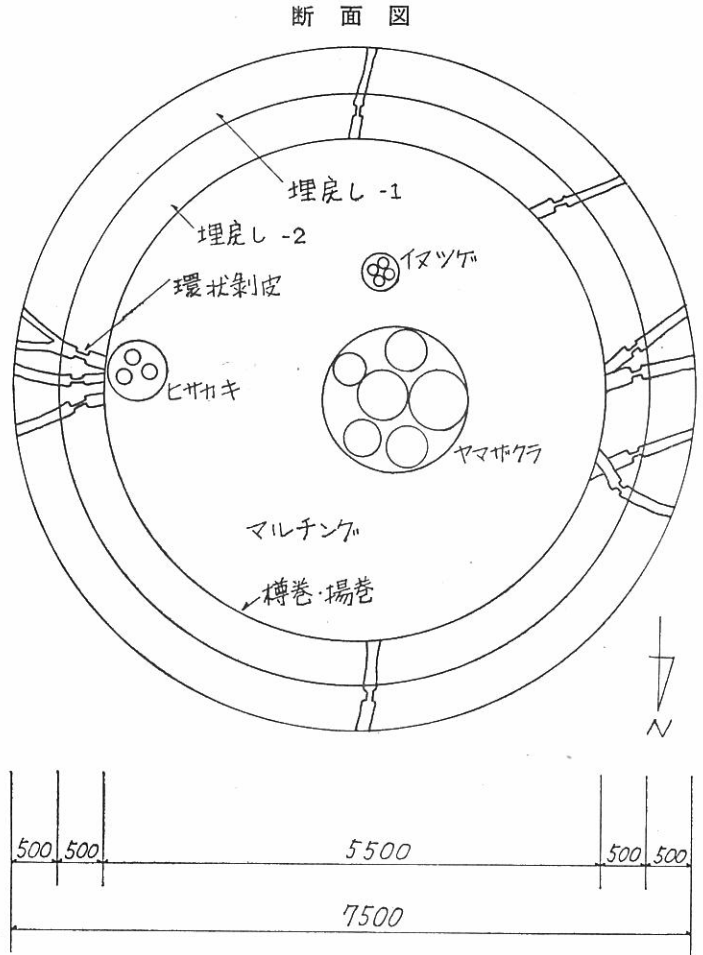
(4)根鉢の側面に、植物活力剤(メネデールまたはそれと同等品以上)の50倍水溶液を1平方メートル当り2リットル散布する。

(5)埋戻しに当っては、根鉢の側面から50センチの幅に、パーク堆肥608袋(1袋20kg入)と、溶性燐肥3袋(1袋20kg入)を混合したものを埋込む。いままでの実験や実例によると、細根を発生させることに効果が著しかったからである。

(6)根鉢の上部のマルチング、根鉢の樽巻き、揚巻き、などは前図のとおりである。

3. 根回し後の経過

根回しを行った年の春は、桜の花の色が悪く心



配させられた。夏は、例年がない早ばつ年でせつせと水をかけた。定期的に調査しているが、細根の発生状態は極めて良好である。根回し2年目の2月、これくらい細根が発生すればいつでも移植できると植村博士の診断が下った。

しかし、工事の都合でもう一年移植を延期することにし、56年2月になる見込みである。そうするとまた、根が伸び過ぎて、移植時に切れたり折れたりして、植いたみがひどいのではなからうかと心配になる。

立派に活着した報告の記事が書ける日を祈る思いである。(口絵写真をご参照下さい)

老桜の移植

多摩ニュータウンの八王子より、つまりこれから開発が予定されている地区。その小高い丘に数10本のヤマザクラがある。このヤマザクラ、ニュータウンの建設と京王線の延長工事にかかるため伐られる運命にあった。しかしこのサクラはご神木。その下には祠があり、かつては地元信仰をあつめていたものと思われる。地元では「電車の軌道をかえてもこの丘を守ってほしい」と陳情していたがそれもダメ。次善の策としてご神木をふくめ樹形のよいサクラ4本を移植することになった。この移植工事を依頼されたのが本州緑化。同社の高原常務と4月の中旬その現場をみにいった。時あたかもサクラの季節。そこに薄紅色の巨大な傘を広げたヤマザクラが見事に咲き、それは一幅の山水画をみる思いだった。ご神木のサクラは巨大な6本の幹が株立ち（2本は中途より折損）した、樹令200年をこえるという偉容をほこり、他の中径木を従えるように屹立している。樹高14m、樹冠は16m、樹勢は旺盛である。昭和51年、根切り、発根処理、来年2月に移植するというが、総重量100トンを超える老桜をそのまま無事に移植できるか気になる場所である。「サクラ切る馬鹿」というように現樹形をこわさず移植することは相当な困難が予想される。地上部、地下部を問わず傷からの病菌の侵入に対し抵抗力の弱いサクラは枯れ部分を広げ衰弱、枯死するケースが多いからだ。それに環境の急変にどう対応できるか。その前途は多難である。無事に活着することを祈りたいものだ。なお高原先生の移植技術、本文30頁を参照のこと。

